

器玩展



16 菟道真景詩画器局

会 期

6月22日(水) ~ 8月7日(日)

月曜日休館

器玩の世界

器玩という言葉の字義については、前回の展示の機会に言及した。すなわち慰みとすべき道具や器をさすことは勿論であるが、元来は中国に古くから「天子器玩、皇后服飾」なる語があり、それは天子の賞でるものを器玩とし皇后のそれを服飾として、趣味の志向を対照的に指したものである。天子の趣味とし愛玩するところの器玩ともなれば、当然想像を絶するほどの奢侈が考えられ、その品々の豪華さや精巧の度合いが推察され、事実今に遺る数々の工芸品がその一端を語っているが、いずれにせよ、建物構造の空間を飾り、ものの用を弁じ、或いはそれらのものを収納する諸道具、器の類で愛玩するに足るもの、と定義することができるだろう。したがって、それは本来、身分階層の上下を問わず、人々の趣味生活にひろく見られて当然であり、それらは時代の風俗を伴いながら、常に存在してきたことはいうまでもない。そして個人的にもその人の、いうなれば文化生活を彩る最も端的かつ具体的な例証として把えることができ、逆にいえば、個人が蒐集し或いは製作したこの器玩類こそ、その個人の人となりや好尚を明快に反映している筈だ。天子といわずとも、武人は武人の、文人は文人の、庶民は庶民のという具合に。

さて、今回の鉄斎にかゝわる器玩類であるが、これは大体次の二種にわけて考えられる。一つは器局や箱、盆などの工芸品に絵を描いたり、陶器に絵付けをしたものであり、今一

つは、みずから製作したもの、たとえば手びねりのやきものなど、余技的な作である。全く手すきびというような作は割愛するとしても、それなりに鑑賞できる作はここに入れている。鉄斎は煎茶を身近な趣味としていたからまず第一に煎茶関係の諸道具が多いのであるが、中でもみずからの工夫による煎茶皆具なるセットは、およそ器玩の概念を包括したものである。しかしその他の分野でも対象として選ばれた工芸品は多種多様で、まさしく身近周囲のものの手あたり次第という感さえ抱かせる。書または絵画が、いわゆる二次元の、つまり平面の拡がり内容に均衡させるのに対し、これら工芸品は概ね立体であり、時には不自然な曲面を用いている場合もあるが、それらは鉄斎をして書画に対してとはまた別



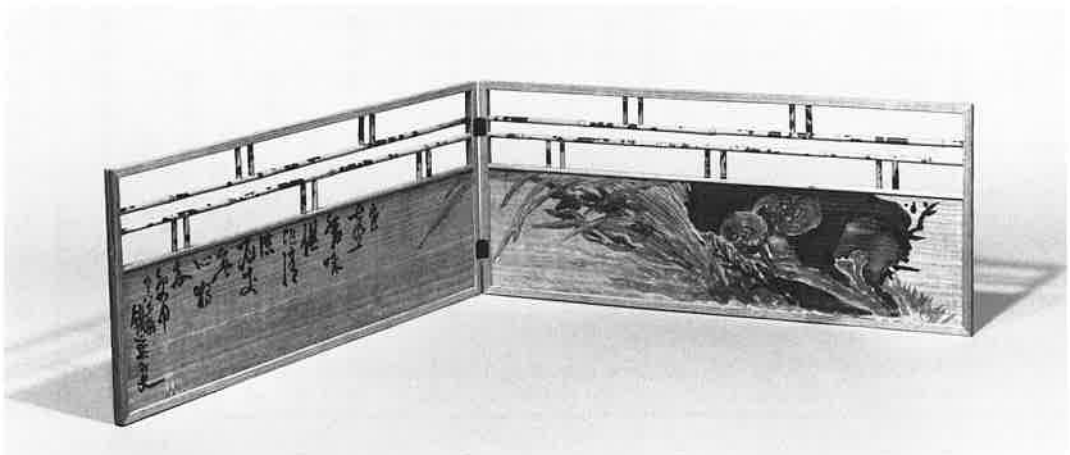
の好奇心や表現欲を刺激せしめたに違いない。それはたとえばやきものの絵付けの場合に特に感じられるのだが、その形姿に適した表現というものは、実は心からの興があつてこそ趣きが生じるものであろう。そういった興というものは、案外、儒学者そして文人鉄斎が生涯を通じて避けていた「画家」の資質をはしくも語っているように思われる。そう



30 四君子絵桐茶壺 一双

いえば展示の中で多分大方の目を惹く美しい木地に彩色を施した器局、文台、文庫の類の絵は、ほとんどが花鳥画であるのも面白いことだ。勿論鉄斎のことであるから、「意味のない」花鳥画である筈はないが、もともと花鳥は婦女子の慰みなどと語っていた鉄斎にしてみれば、これはやはり、その諸道具に付ける絵が、本来、鉄斎の考えている絵画のもつ効用から離れた、一種の装飾として認識されていた、と考へても誤りではなからう。器玩の存在そのものが趣味であり、加えてその形態、構造が趣味生活の用を弁じ、飾るものであれば、その絵が装飾に適った様式をとるのも自然の理である。そしてその様式はと難しく訊ねれば、それが琳派風となるのもまた当然であり、そこに「画家」の資質が本然と顕れるのも止むを得なかった。つまり我々は、そこに描かれた「四君子」が、与えられた面から飛び出るような生新な気韻と、匂うような華やかさを持っている事実に鉄斎芸術の紛うことなき一面を見るわけで、そのことは他の作品にも多かれ少かれ窺うことができるのである。

こうした表現内容から離れ、その種類を見渡すと、前述したように生活人鉄斎の趣味・好尚のひろさがあらためて感じられる。そこでは文人としての理想と現実の調和を図る、ひとりの人間性が如実に語られる。それは明治から大正期にわたる欧化文明の只中であつて、ひとり伝統を重んじ、東洋的美的環境を愛した人の具体的な例証でもある。そういつ



37 歳寒三友図炉屏

た例証のうちで、我々が特に感嘆させられるのは、煎茶関係の品はもとより文具にせよ茶菓の器にせよ、その材質の多様性及びその材



56 双寿千年絵染付煎茶碗 五客

質に適應する自然に備わった感性の豊かさである。やきものを筆頭に、それは木工、金工、染織、漆などに及び、それらの器物の多くが当時の知名な工芸家の手に成るだけに鉄斎との組みあわせの妙がまた捨てがたい。多分、当時の風潮としても大いに求められたことであろうし、鉄斎としても進んでそれら優品を前に、創造心と興味を覚えたであろうことは前述した通りである。それらの人の名を挙げると、陶芸家では、三代・四代清水六兵衛、祥随五郎助、初代・二代三浦竹泉、諏訪蘇山など、金工家では二代・三代秦蔵六、三代高木治良兵衛、指物師（木工）では中島菊齋など、当時の京都における名人上手を網羅している。

現代では残念ながら、そんなに心安く器物に絵を描いたり文字を書き連ねたりする傾向は少なくなった。巷間、手仕事の手が落ちたとはよく聞く言葉である。世の中がせわしく、一事に集中できないこともあり、技術修得のシステムも変った。それに建物の構造をはじめ、人々の生活空間自体も変り、機能的なる語が示す通り、一見無用の用に近い楽しみは人々の趣味からは遠くなった。工芸作品は専門分化され、その間の交流も少く、その昔の合作などというごく自然な営みも成立しがたいようである。異種なる技や芸の組みあわせも、したがって見かけることが稀である。その上、明治や大正の頃に、実用に供されながら丁寧に鑑賞されるという、静かで奥ゆかしい工芸品への愛情や、それらを身近に蒐めて季節に適った出し入れを行い、手入れに心を遣うという風習も薄れたように思われる。いま、こうした品々を美術品としてみるのも、時代による人間の心のあり方の変化を、時間の中に停止して定着させ、後世へ伝えるという働きをしているように思える。時代と共にあらゆる事象の内容が変化し、それと共に価値観が変るのは当然であるが、狭義に固苦しく美的対象物とのみ把えるのも問題であろう。しかし現代はそうした認識がもっとも一般的になった時代であり、だからこそ一部の好事家やコレクターの収蔵庫からそれらの作は展示ケースの中に移っていった。歴史をさかのぼり、過去の生活や文化、習俗などを想像して見て頂くことを願わずにはおられない。

(村越英明)

《出品目錄》

番号	題名	制作年代	年齢	寸法	作者名
1	人物絵染付火鉢	1867 (慶応3)	32	23.4×22.9	祥随五郎助
2	寿字陶鼎	1867 (慶応3)	32	22.5×24.4	祥随五郎助
3	名花十二客絵染付吸物碗	不詳	30代	(各) 7.8× 8.6	三代 清水六兵衛
4	狸絵捏茶碗	不詳	60代	6.0×10.0	鉄斎・春子合作
5	羅漢図薨鉢	不詳	60代	9.6×15.5	三代 清水六兵衛
6	煎茶碗五客	不詳	60代	(各) 3.8× 6.4	鉄斎・春子合作
7	十友図菓子盆十客	不詳	60代	(各) 1.3×13.7	
8	喜寿書沙鍋	1912 (大正1)	77	7.1×35.9	深草平左衛門
9	竹石絵染付水注	1914 (大正3)	79	17.1×19.8×11.9	四代 清水六兵衛
10	紅葉絵団扇	1914 (大正3)	79	37.2×21.4	
11	茶盒一双	1914 (大正3)	79	(各)11.3× 5.0× 5.0	一瀬小兵
12	菊絵茶碗	不詳	70代	5.5×13.7	四代 清水六兵衛
13	茅屋香炉	不詳	70代	7.3× 7.0× 5.5	鉄斎手造
14	竹絵茶用団扇	不詳	70代	27.0×41.5× 1.2	
15	仁者寿字陶印	不詳	70代	4.7× 5.3	鉄斎手造
16	菟道真景詩画器局	不詳	70代	47.5×45.3×29.0	中島菊斎
17	人物絵染付急須	不詳	70代	7.6×10.3×11.6	四代 清水六兵衛
18	鶴亀絵付井鉢	不詳	70代	9.6×23.4	四代 清水六兵衛
19	茶杓銘野々宮	不詳	70代	1.9× 1.1×18.1	鉄斎手造
20	芝蘭図煎茶碗	不詳	70代	4.6× 8.7	松斎
21	煎茶碗五客	不詳	70代	(各) 4.7× 6.0	鉄斎・春子合作
22	樺炭斗	不詳	70代	16.0×23.7×22.3	
23	俵香合	不詳	70代	4.2× 5.8× 4.2	鉄斎手造
24	富岳図楽茶碗	不詳	70代	7.5×11.0	
25	菊画贊湯瓶	不詳	70代	11.0×13.0	二代 秦蔵六
26	お多福図茶吧	1915 (大正4)	80	24.0×22.0	
27	松竹梅墨芝絵料紙文庫	1915 (大正4)	80	硯箱 5.4×22.7×25.9 文庫 13.7×34.0×41.5	中島菊斎
28	萬歳書茶碗十客	1915 (大正4)	80	(各) 4.7× 8.0	初代 三浦竹泉
29	木製対聯	1915 (大正4)	80	(各)85.5×18.0× 2.5	
30	四君子絵桐茶壺一双	1915 (大正4)	80	(各)11.4× 7.8	中島菊斎
31	蟹絵茶炉屏	1915 (大正4)	80	41.0×60.0×29.0	中島菊斎
32	金剛杵	不詳	80代	1.0× 3.2× 7.1	
33	軸首	不詳	80代	(各) 3.0× 3.2	鉄斎手造
34	支那小囊	不詳	80代	11.5×14.0× 7.5	
35	吉野山絵茶碗	不詳	80代	8.6×12.7	英昌堂 泰山
36	茅屋香炉	不詳	80代	6.3× 6.7× 9.0	鉄斎手造
37	寒三友図炉屏	1916 (大正5)	81	31.5×72.2×72.2	
38	竹製榎樽	1916 (大正5)	81	12.7×15.7	
39	客来一味書画桐木地箱	1916 (大正5)	81	9.8×11.2× 8.2	
40	松芝不老絵文台	1916 (大正5)	81	10.3×57.5×35.8	中島菊斎
41	游魚図溜金下絵滓盃	1916 (大正5)	81	5.3×13.7	中島菊斎
42	円形茶壺一双	1916 (大正5)	81	(各)10.0× 5.3	陶…初代 三浦竹泉 錫…三代 秦蔵六
43	茶心壺	1917 (大正6)	82	8.2× 6.3	寶山
44	瓢杓	1918 (大正7)	83	10.2×82.0	中島菊斎
45	茅屋香炉	1918 (大正7)	83	7.8× 6.5×11.0	鉄斎・春子合作
46	魚形巾台	1918 (大正7)	83	(各) 2.8×10.9× 5.6	鉄斎手造
47	倣銅器式桐香炉	1919 (大正8)	84	7.2×10.2× 7.8	中島菊斎
48	竹插花器銘虚心抱節	1919 (大正8)	84	39.7×16.8	銀火舎…三代 秦蔵六
49	古桐炉淵	1919 (大正8)	84	42.4×42.6× 6.6	指物師 芦流
50	竹製茶碗筒	1919 (大正8)	84	11.2× 8.5	
51	田家早梅図茶碗	1919 (大正8)	84	6.2×11.8	鉄斎・春子合作
52	菊香合	1919 (大正8)	84	3.5× 5.5	鉄斎・春子合作
53	急須	1919 (大正8)	84	7.0× 7.2	二代 三浦竹泉
54	倣茶式煎茶碗六客	1919 (大正8)	84	(各) 3.7× 6.2	二代 三浦竹泉
	木米隠栖図竹茶碗筒			11.0× 7.7	木米題識
55	詩書手影花生	1920 (大正9)	85	40.3×18.5	四代 清水六兵衛

番号	題名	制作年代	年齢	寸法	作者名
56	双寿千年絵染付煎茶碗 五客	1920 (大正9)	85	(各) 4.5×6.7	五代 清水六兵衛
57	狸香合	1920 (大正9)	85	6.2×5.8×6.5	鉄斎手造
58	蓮月幽居図四方釜 蓮月尼歌贊	1920 (大正9)	85	28.4×22.7	三代 高木治良兵衛
59	高遊外詩画染付菓子鉢	1921 (大正10)	86	8.8×18.4	諏訪蘇山
60	蓮絵染付茶碗	1921 (大正10)	86	8.7×12.1	英昌堂 泰山
61	蘭菊図器局	1921 (大正10)	86	36.3×38.5×24.5	
62	炭斗	1921 (大正10)	86	19.0×20.5×21.5	
63	清風二字茶旗	1921 (大正10)	86	53.0×44.5	
64	方竹插花器	1921 (大正10)	86	35.5×9.0×12.0	
65	瓢絵組立風炉先	1921 (大正10)	86	29.0×93.0×93.0	
66	木米隠栖図下絵竹棗	1922 (大正11)	87	5.5×7.9	
67	插花竹筒	1922 (大正11)	87	19.0×15.0	
68	扇式菓子器	1922 (大正11)	87	17.8×31.2×10.6	中島菊斎
69	四君子絵桐印篋筒	1923 (大正12)	88	39.5×40.8×28.5	中島菊斎
70	蘭絵手提	1923 (大正12)	88	18.8×19.0×18.7	
71	蘭絵団扇	1923 (大正12)	88	23.8×21.5	
72	松絵釜銘松風	1923 (大正12)	88	20.6×23.4	三代 高木治良兵衛
73	亀絵桐雕盆	1923 (大正12)	88	27.5×47.0	中島菊斎
74	青華香合	1923 (大正12)	88	3.2×6.7	諏訪蘇山
75	槌	1924 (大正13)	89	6.3×7.7×15.0	中島菊斎
76	清風二字売茶式大旗	1924 (大正13)	89	58.0×46.4	
77	做銅器式桐香炉	1924 (大正13)	89	24.1×25.4	中島菊斎
78	傳窠書売茶式器局	1924 (大正13)	89	55.6×26.7×27.6	中島菊斎
79	竹詩画団扇	1924 (大正13)	89	(各)40.0×30.8×2.4	
80	匏菓子器	1924 (大正13)	89	17.0×21.5	指物師 豊齊
81	白泥湯罐	1924 (大正13)	89	7.0×12.4	諏訪蘇山
82	煎茶皆具 25点				

出品作品は期間中下記の通り二回にわけて展示いたします。

但し一部作品は重複することがあります。

前期 6月22日(水)～7月17日(日)

後期 7月19日(火)～8月7日(日)

8月8日(月)から8月17日(水)まで休館いたします。

鉄斎美術館 〒665 宝塚市清荒神清澄寺山内 電話 宝塚(0797)84-9600
昭和63年6月20日 印施